

保健体育科研究委員会

1. 研究テーマ

「運動の楽しさを味わい深めていく体育学習のカリキュラム」

2. 研究課題

(1) 研究授業について

《北信学校体育研究会》

平成16年6月21日(月)高甫小学校、相森中学校

- ・高甫小学校 「リレー遊び」 2学年 小林都史教諭
- 「パス&シュートゲーム(ハンドボール)」 6学年 岡島美由紀教諭
- ・相森中学校 「体づくり運動」 1学年 北垣内博教諭

《長野県学校体育研究大会・上高井大会》

平成16年11月12日(金)高甫小学校、相森中学校

- ・高甫小学校 「するっとボール」 2学年 小林都史教諭
- 「ソフトバレーボール」 6学年 岡島美由紀教諭
- ・相森中学校 「全員攻撃、全員守備！コンビネーションサッカー」 3学年 北垣内博教諭
- 「チームワークでシュートをめざせ！バスケットボール」 3学年 深町幸子教諭

(2) 研究内容について

公開する高甫小、相森中学校の研究の方針、方向を大切に、6月には北信学校体育研究会において授業研究を行った。11月の県の大会に向けて研究の内容や方向性を明らかにするとともに、昨年の研究で残された課題をふまえ、研究の柱を「児童生徒の実態(ニーズ)を分析し、そこに学校、教師の願いとを合わせながら単元設定をして、カリキュラムの編成を行う。」こととして、以下の研究の視点を決め出して進めてきた。

運動種目について、一人一人の経験や感じ方について事前調査をし、子どもたちの立場で見返す。

教師の教材観から運動の価値を見直し「単元のねらい」を決定し、「学習のみちすじ」を立てる。

個人差を認め、だれもが楽しめる運動にするためのルールや用具の工夫、教材化をする。

仲間との関わりが運動の楽しさをさらに深めるという立場に立ちカリキュラムに位置づける。

3. この研究から明らかになったこと

運動の楽しさを味わい運動に没頭する児童・生徒

県大会での四つの授業は、どの授業も児童・生徒が一生懸命になって運動する姿が見られたという意見が多く寄せられた。これは一般的な特性・子どもから見た特性に始まり、本時案へとつながっていくスタイルの指導案によって、学習内容が子どもたちに適したものとして仕組まれたことからだと考えられる。また、授業者の教材観が生かされた点も大きい。具体的には、種目そのものにこだわり、いろいろな価値がよく研究されていた「するっとボール」、少人数の固定ポジションで個の役割を意識させた「ソフトバレーボール」、男女共習でポジショニングやチームワークを大切にした「サッカー」、男女別で遠慮することなく思い切って動く中で役割や動き方を追求した「バスケットボール」などが挙げられる。

運動の楽しさを深めていくような学びの姿勢

学習では友との支え合い、教え合いなど、友との関わりによって学ぶ場面は大切である。学習する仲間としての意識やチームワーク、その運動の特性や価値に触れながら追求しやすい学習形態、対人的なコミュニケーションなどの関わりを意識して学習展開を進めたことで、お互いに安心して活動できる場

が生み出され、個やチームの課題追求が活発に行われた。

また、研究の視点として挙げた点についての成果は以下の通りである。

- (1) 児童生徒の実態分析は、運動の特性と学習経験、個々の技能や心理といった点を中心に児童生徒の立場から検討を重ねたことで、運動の価値がはっきりし、「ねらい」や「学習の道筋」が明確なものとなった。
- (2) 児童・生徒のニーズを大切に、だれもが運動に関わり楽しさを味わえる学習の場を工夫し、教材開発を進めたことで、主体的に学習を進める姿が生み出されていった。
- (3) 友との関わりに意識をおいた学習展開を工夫したことで、互いに認め合い、支え合う姿が学習の中に見られ、運動の楽しさや喜びを互いに味わいながら深めていくことにつながった。

4. 指導の実際（ソフトバレーボールを取り上げて）

(1) チーム内のコミュニケーションを円滑に図る工夫

ねらい1では、チーム作りを中心とし、自分たちのチームらしさを考えさせた。学習カードを工夫して、ゲーム前のかけ声 喜び合い 励まし合い チームの約束の4点についてグループごとに毎時間振り返らせた。かけ声や喜び合いの声が次第に出てくるようになり、キャプテンやムードメーカーを中心に「よし来い。」「一本カットするよ。」などとボールをつなげるための声も聞かれるようになった。ねらい1でチームらしさを考え合い、チーム作りをしたことは、運動技能が低い子でも仲間と共に楽しめる要因になった。

ねらい2では、チームの作戦をポジションと役割にしぼり話し合わせた。キャプテンを中心に意見を出し合いながら、チームのメンバーの特徴を生かし、メンバーに合った役割を考えていた。経験者や話し合いをリードできる子をグループの中に入れ、リーダー指導をしたり、担任の願いを伝えたりしたことは、話し合いを活発にし、チームらしさを作り上げていく上で効果的であった。

(2) みんなが楽しめるルールや場の工夫

アンケートの結果より子どもたちはラリーが続いて、ボールにたくさん触れることが楽しいと感じていた。そこで次のようなルールや場の工夫をおこなった。グループの人数を四人と少なくしてチャンスが数多く回るようにした。サーブをアンダーで投げ入れにし、タッチ数無制限にしたことで、サーブでゲームが途切れることがなくなった。また、タッチ数が無制限のため、ボールがそれでもあきらめずに拾ってつなげる姿に結びついた。ボールを軽いレクリエーションボールにしたことで、子どもたちの恐怖心を取り除き、実際のバレーボールをやりたい子の願いにも合っていた。膝サポーターを着けたことで、転んでも痛くないという安心感から、滑り込みをしてボールを追いかける積極的な動きが見られるようになった。ネットは、短時間で子どもたちだけで張れる工夫をし、8チームが同時にゲームができるようにしたことで、運動量の確保につながった。

(3) 学習の道筋の工夫

ねらい1では、チーム作りをしながらラリーを続けてゲームを楽しむ事を中心に進め、ねらい2に入り、ねらい1で作り上げたチームらしさを更に伸ばしながら、チームの作戦を練り上げ簡単な攻撃をしてゲームを楽しんだ。子どもたちはこの学習の道筋を理解し、ねらい1では攻撃をひかえ、声を出し合い、ラリーを続けようと積極的に取り組んだ。結果的にそのときに培った チームらしさ、ラリーを続けるための声かけ、あきらめずにボールを追いかけ、ボールを高く上げようという個のめあてが、ねらい2の攻撃のときに大変生かされた。

5. 来年度への課題

- (1) 学習後の児童生徒による評価は記述式のものを中心に行ったが、カリキュラムの編成とともに評価の進め方、形式、分析についてもさらに具体的に検討を進めていきたい。

